

兵庫県現代詩協会 会報51号

2022年7月1日 発行…時里二郎

詩への思いをいっそう高める活動を企画していきます

会長 時里二郎

新型コロナウイルスの影響を受けて、2年続けて、総会は書面で行わざるを得なかったのですが、今年度は、ようやくラッセホールでいつもの総会を開くことができました。顔と顔を見合わせながらの総会は、やはりほどよい緊張感があり、新年度にむけての活動への意欲と期待を肌で感じました。総会の挨拶でもお話ししましたが、この会のそれぞれの活動に参加すれば、帰ってからすぐに、新たな詩の行動を起こしたいと思うようなものになればと思っています。

活動の大きな柱である『詩のフェスタ』では、松下育男さんをお招きします。タイムリーに、氏の著書『詩の教室——これから詩を読み、書くひとのための』（思潮社）が出たばかり。それがとても評判になっているようです。「生きるための詩」というものがあっていいと思う／／生きていくために／ただ書いている詩が／あっていいと思う／／生きがいなんてない／と／感じる人が／俯いた先で書ける詩があつていいと思う／／どこにもでかけたくなくて／誰にも会いたくない人が／この世の端っこで書く／生きるための詩が／あつていいと思う」（松下育男）

それから、今年度は恒例のアンソロジー『ひょうご現代詩集2022』の刊行の年になります。会員ばかりではなく、このアンソロジーは、地域の施設のみならず、



で、多くの会員の方々の参加をお待ちしています。

第26回定期総会報告

5月15日(日) 13時30分よりラッセホールに於いて第26回定期総会を開催。過去2年間コロナ禍の為止むを得ず総会は中止して書面にて総会議案の議決を行ってきたが、今回3年ぶりに総会を開くことができたのは喜ばしい。出席者27名委任状提出49通で会員総数125名の3分の1以上の出席で総会は成立。議長野本正氏を選出して、議案の7項目全てが満場一致で可決された。依つて承認された議決事項は次の通りである。

- ① 入退会等の承認
- ② 2021年度事業報告
- ③ 2021年度会計収支決算報告
- ④ 2021年度会計監査報告
- ⑤ 2020年度事業計画案
- ⑥ 2022年度予算案
- ⑦ 会則規約の補足

主な全国の詩の協会や組織にも配布されます。自分の作品を広く全国の詩の読者に読んでもらう、願ってもない機会にもなると思います。多くの会員の方々の参加を願っています。他にも、『ボエム&アートコレクション』や、詩人の詩を読む読書会、文学ゆかりの土地をめぐる文学紀行などの活動も企画しています。

会則第5章会の運営第16条の条文の後に補足「なお、災害、疫病の流行等により、総会の開催が困難な場合は、書面議決をもって総会に代えることができるものとする。」

- 1 総会
 - 2 ふれあい文化の祭典 詩のフェスタひょうご2021
 - 3 ポエム&アートコレクション展／特別イベント
 - 4 読書会
 - 5 名簿発行
 - 6 会報発行
 - 7 ひょうご現代詩集2022 第16集発行
 - 8 役員選挙
 - 9 文学紀行
 - 10 ホームページの活用
 - 11 関西詩人協会&兵庫県現代詩協会の交流会
 - 12 理事会(常任理事会・詩のフェスタ実行委員会等)その他(新入会員拡大に向けての検討)
- ご協力ありがとうございました。
- 事務局 山本真弓

■二部 大西隆志氏講演

「歌謡と詩：姫路の詩人大塚徹を通しての一考察」

文・田中信爾

一、歌謡について
歌謡とは何か。自分はアメリカのカウンターカルチャー、その一つとしてのアメリカンフォークソングに若い頃に出会い詩を書くきっかけになった。アメリカであれば、ボブ・ディラン、日本であれば吉田拓郎などがいた。

またその頃ギターにも出会った。そして現代詩とは少し違う詩を目ざすようになった。とにかく歌うのが好きであった。

ここで日本の歌謡について考えてみたい。日本には謡、里歌、労働歌、小歌、童謡などがある。例えば民謡郷土の特色を出すものといえる。口承文学というものも問題と

「ふれあい文化の祭典・詩のフェスタひょうご2022」について

主催 ふれあい文化の祭典・詩のフェスタひょうご実行委員会・兵庫県・公益財団法人兵庫県芸術文化協会・兵庫県現代詩協会

日時 10月2日(日) 13時30分から16時(受付13時~)

場所 ラッセホール・サンフラワー

〒650-0004神戸市中央区中山手通4-10-8 電話078-291-1117

講演会 講師 松下育男氏(詩人) 演題「詩を読むこと・書くこと」

9月17日(土)までに葉書で申し込んでください

申込先 〒657-0846 神戸市灘区岩屋北町4-4-5-902 野口幸雄宛

松下育男氏プロフィール 1950年福岡県遠賀郡生まれ。主な著作 *詩集『肴』(第29回H氏賞受賞・詩集『コーヒーに砂糖はいれない』・講義録『これから詩を読み、書く人のための詩の教室』他

なってくる。詩人、童謡作家としての北原白秋、野口雨情にも注目している。現代詩から考えると少し古くさいと思われているかも知れない。民衆詩派(富田砕花など)も軽く見られている。

二、大塚徹について

大塚については彼の妻であった人との関係から大塚徹を知るようになった。大塚徹(一九〇八〜一九七六年)、旧制姫路中学卒。中学時代の水泳での脊髄の損傷、脊髄カリエスによって生涯苦しむことになった。入院中機能回復訓練代りのハーモニカに出会ったことにより演奏に興味を持ち、バンドを結成するまでになった。彼は若い頃文芸誌「愛誦」に投稿し、昭和四年の「北海の蟹」、昭和五年の「いたつきの歌」によって評価されるようになった。「いたつきの歌」の中の「りんりんりん るるりん るるりん(虫の声)のオノマトペは面白い。

その他大塚徹については、神戸詩人事件に連座したと(無罪ではあったが)、一九四一年の太平洋開戦時には検挙されたこと、その後生活のため「文学報国会」に所属していたことなどが特筆される。戦後は歌謡詞をつくり、オノマトペを多用している。さらにカメラも好きで、写真については一家言あった。

三、定型について

定型(五、七、五)については、生活をどうとらえるかということ、大切だと思っている。最近のラップなどについても関心がある。

以上要するに歌謡史との関連で近現代詩を見直したいと思っている、

最後に大西氏作曲のフォークソングが発表され、しめくくりとなった。

■第11回ポエム&アートコレクション展

会員の詩人が綴った詩とその詩に寄せたアート作品(絵画、書、オブジェ・陶芸・彫刻)を組み合わせた展覧会が神戸文学館で開催された。神戸新聞が催し案内を掲載してくれたこともあり、コロナ禍の下、134名の来館者で盛況だった。出品者:阿部由子・岩崎風子・大西隆志・



大橋愛由等・和比古・香山雅代・後藤益男・高木敏克・玉井洋子・玉川侑香・寺田操・中堂けいこ・永井ますみ・西海ゆう子・野元正・坂東里美・福永祥子・増田まさみ・松下玲子・水こし町子・山本眞弓の各氏でした。 (担当 福永祥子、野口幸雄)

■特別イベント 講演会

文・山本眞弓

講演「詩を書くということ 第3回」 1月15日神戸文学館で時里二郎氏の講演会がポエム&アート展の会期中の特別イベントとして行われた。コロナ禍で予約制の42名が参加した。先ず「詩が言葉で書かれている意味についてお話しします。『言葉が詩人を連れ出す』こと。また詩の一行を書き始めるとどんなことが起こるのかを考えて見たいと思います。『言葉が詩人を連れ出す』こと。『神戸新聞文芸欄(詩の選者担当)の投稿詩を例に挙げる。身体と心の重なるところを/私と呼ぶのなら私はどこにもない/身体は身勝手に発達した男感を醸す(性)星野灯)詩の作者と詩の私にはブレがあり詩の私の方が先をいつている。言葉が私の先をいくことで性の違和感を抱えながら未来を切り拓こうとするそこに詩の原点があると言ふ。言葉は現実そのものを傷つけ、現実そのものから傷つけられる(吉本隆明)。夢の中に手を差し込んで/置き去りにした 私を/だらりとした腕の/消えられない少女を抱き上げて/抱えて来たい/ (消えられないあれを)北爪満喜)出自の不安と向き合うことで「言葉に連れ出さ

れ浮上した」とあとがきに記しているのだ。今なら埋め
た少女を抱き上げることができるとか、**（中略）**女のぼぼって
くる言葉を／はつと／書き留める　ここで／水の底のよ
うに歪む膜を／破って／引き上げられる／今に／詩は自
分の思い・願い・考えを表現することではなく自分を発見
することなのだ。最後に現代詩の《今》を読むことで詩人
たちはどうやって詩を書いているのか、詩を朗読しながら
読み解く。　梨を四つに、切る。今日、海のように背筋
がうつくしい／ひとから会釈されて、こころにも曲がり
角があることを知った　透明になって紛れ込む意表を突
く比喩　私などないまま、あなたの中に、あなたのも
のとなつて溶け込んでいく言葉を書いていきたい。（「愛の縫
い目はここ」あとがき最果タヒ）私は出てこない。相手の
中に潜り込む。言葉が自身に溝を掘り／渦を巻いてこの
世もろとも落ちてゆくものを詩と呼ぶべきか（「12」松
下育夫）言葉に導かれ、言葉に任せることが詩の始まりな
のか、詩集を編むことで自分がわかる、自分の発見がある
という。言葉は《私》の先をゆく副題の意味を問う
有意義な時間であった。

■第21回読書会

今村欣史氏が語る杉山平一氏の思い出

文・大橋愛由等

杉山平一氏（1914—2012）は「名もない詩人
への目配り」が行き届いた詩
人だった。わたしもかつて詩
友たちと共に杉山氏と宝塚で
語り合う機会があり、詩の
後輩に対するこまかな目配り
と気配りを実感していた。



永年、杉山氏と、親しく接してきた今村欣史氏が、「わ
かりすぎて困る詩」をテーマにして、兵庫県現代詩協会の
読書会で語ったのは2021年11月27日。場所は兵庫県
教育会館（神戸市中央区）の会議室だった。

読書会での語りは、杉山氏のひととなりをよく知る今
村氏の温かいまなざしに支えられ、心あたたまるエピソ
ードをちりばめた親和的な内容であった。

今村氏が詩へ向かっていった動機のひとつは、こども
のなげない言葉だった。あるとき鳥が飛び出していっ
た。こどもは「じいじ、いまきれいな鳥が飛び出したよ
」と言う。米を配達している車の中では「お月さんついでく
る」車が止まったらお月さんもとまる。それを聞いた今
村氏はこうした純粋な感性にもとづいたこどもの言葉を
書き留めておかねばと思い立ちノートに記述しはじめた。
それを1991年に口頭詩集『ライオンの顔』にまとめて
上梓した。私家版で30部ほど。

同詩集にはたとえば「心つてあるの？／どこにある
の？／体の中にあるの？／さわられへん？／見えへん？」
といった作品が収録されている。

今村氏はこうした作品は杉山氏の詩世界に通じるもの
があると直感し、詩集を謹呈した。すると杉山氏から「こ
の人に送らなさい」と紹介されたのが、まどみちおだった。

詩集『工場風景』もやはり私家版で30部ほど制作し
た。杉山氏は、またも「このひとに送らなさい」と小関
智弘、出久根達郎を紹介してくれた。杉山氏の人脈の広
さに感心するばかりであった。

詩集『コーヒーカープの耳』を2001年に上梓した
ときは、出版記念会に杉山氏が来てくれた。その時「わ
たしはずっと前からあなたを知っていたようだ」と今村
氏がこども詩集を出すことを報じた新聞を切り抜いてい
たことを紹介されたのである。

こうして今村氏は杉山氏のひととなりと詩世界と接し
ながら、詩人としての履歴を重ねていった。そして、そ
れだからこそ杉山氏の詩業の特質である「わかりすぎて
困る」作品であるのは、詩世界の住人を超えた文学と言

葉の魅力に満たされていることをわれわれに示してくれ
たのである。

■第22回読書会予告

2022年8月6日（土）
県民会館902号室　午後1時～
「松下育男の詩について」
チユーター…佐伯圭子

『ひょうご現代詩集2022』のこと

今年度（2022年度）は隔年に出版いたします
アンソロジー『ひょうご現代詩集2022』を発行
する年です。兵庫県現代詩協会の会員すべてのみな
さんの意欲的な詩稿をお待ちしています。詩稿を出
稿するさいの文字数、参加費などといった詳細は、
8月中旬に会員のみなさんに送付いたします。ハガ
キを参考にして下さい。

▲原稿締め切り 2022年10月15日（土）

▲原稿の送り先 電子メール

(maroad_kobe@yahoo.co.jp)

に送っていただくのが、編集上ありがたいのです
が、郵送の場合は左記までお願いします。

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1-7-1

カルメンビル2F 大橋愛由等

■【詩で開こう】ハルコと未来を】

関西詩人協会&兵庫現代詩協会のコラボレーション
7月18日（祝）13時30分～16時30分
西宮市民会館1階大会議室
西宮市六湛寺町10-11 TEL:0798-33-3111
詩の朗読・詩誌詩集の紹介・展示・音楽演奏など、
詩を語る交流のひとときを過ごしてみませんか
問合せ TEL:078-241-3086（担当：山本真弓）

■第8回文学紀行 《龍野文学紀行報告レポート》

文・原田ひでよ



数日前から気温はぐんぐんあがり、そぞろ歩きには絶好の陽気。姫路発の姫新線に乗り込み、街中から田園風景へと走ること20分、本龍野駅に到着。なんと龍野には姫新線の「本龍野駅」と山陽線の「竜野駅」の二つがあるそうで、どちらのたつの駅なのか、注意書きが付け足される事も多いのだとか。

広々とした駅前から、播磨の小京都と呼ばれる趣きある町並みへ。先導は、大西隆志さん。そしてもう一人、強力なナビゲーターは、竜野在住の浜田多代子さん。通りをたどってゆくとやがて竜野の誇る揖保川が、川向こうの山や建物とともに眼前に開けます。高瀬舟で、物資を運ぶ水路として栄えた揖保川。一方、堤防がたびたび決壊する暴れ川である揖保川。地元住民の方々は、河川と住宅との間隔が狭いため高い堤防が必要なのはわかっている、川が見えなくなるのはいやだった。そこで、いろいろと勉強して、長良川の特設堤防を見学。これこそが望んでいた命と景色を守る堤防だ。こうして、洪水時だけ欄干に畳を差し込む「畳堤」が作られたのです。畳のある家が少なくなつた現在、市では千枚もの畳を保管し、年に一度は、実地訓練も行われるそうです。橋を渡るとき、「橋のこちらと向こうでは天気が違うんだ、向こうだけ傘がいることもある。」とのお話も聞きました。

ここからは、至る所に城下町の佇まいが残る、たくさん見所を巡ります。

全国でもまれに見る、鉄分の少ない良質の軟水は、薫り高い薄口醤油の秘密の一つでもある由。資料館では、醤油作りが始まった頃の昔ながらの行程を、具に見ることが出来ます。如来寺には、露風遺愛の筆が「松風の清きみ山にひびきけり 心澄むらん月明らけく」の碑とともに納められています。「武装のある屋敷」との説明しながらの龍野城では、マスク越しにも、ふわりと梅の花の香り。時季は3月、訪れる先々でも、道行く通りのあちこちにも、雛飾り。企画展では、ふだんあまり目にする事のない、古代のおひな様にも遭遇。少し頭が大きくて、なんとも素朴な風情。霞城館、矢野勘治記念館では、三木露風、矢野勘治、内海青潮、三木清らの遺品、蔵書などが展示されています。

そして、竜野と言えば「赤とんぼ」で知られる詩人三木露風。幼くして離ればなれになった母への思慕を抱き続けた生涯であったこと。母の碧川かたさんは、波瀾万丈の人生の中で婦人参政権獲得に尽力した、進歩的な女性であったこと。その「かたさん」をNHKの朝ドラのヒロインにしようと、たつでは様々な活動が展開されていること。浜田さんが、『赤とんぼ』永速に三木露風の母碧川かた物語』という美しい絵本を執筆されたこと。『赤とんぼの母』碧川かた物語』というCDの作詞も担当なさったこと。しみじみ心に沁みるその演奏は、大西さんの所属されているバンドで、大西さんもマンドリン、バンジョー、コーラスで出演されていること。本場に多くのことを知る機会を得ました。醤油と並ぶ名産ソーメンたっぷりのランチ、養蜂家オーナーの営むハイセンスなリノベハウス「よきかな」でのティータイムも、旅の素敵なアクセント。

新入りの私にとっては、『三木清』人生論ノート』前に「あの頃、みんな持ってたね」「読まなくても、まず持つてきやいけなかった」そんなやりとりや、メンバーの方々の現代詩についての会話を前にして、お仲間に加えていただいた新鮮な刺激と喜びを感じられた旅でした。



■会員の詩集評

時里一郎

◎竹之内稔『ことわり付養神』（七月堂）。竹之内稔は荒川稔さんのペンネーム。充実の第一詩集。竹之内さんは、コロナやSNSやマスクやマスコミなど、ナマな用語をそのまま使い、寓話的な手法と、揶揄や皮肉や世相批判を通して徹底して、この国の社会や世相の実態を腑分けしていく。教育からコロナ禍による社会の変異、変貌する若者、SNS社会のゆがみ、権力やマスコミ、それらに翻弄される従順な大衆に対する筆者のいらだちや諦念すらもそこから読み取れる。この露骨なまでの日本社会の戯画もしくは寓意は、ゆるぎない表現の技術に裏打ちされていて、とてもリアルに読者にせまってくる。「転勤と書かれた紙一枚で／自分は 風船なんだと思いつらされる／黒雲の中／強風に弾き飛ばされながら くるくるくつくと漂っている／あんなに枝に絡まった紐を 解いてほしかったはずなのに／こうして旅に出てみると／あんなに退屈でつまらなかつた時間が／実は青空の ひと時だったんだ」と 気づかされる（令和二年 四月）。21年9月

◎丸田礼子『夕陽が背中を押してくる』（澤標）。第五詩集。前詩集から20年経つ。「それにしても／さらにさらにその向こうの／丘陵地に並ぶ／裸木のシルエット／その立ち姿は素数／いいな いいな／耳に届くのは／1と自分

自身でしか／割り切れないってことね」。丸田さんの詩のスタイルは、「素数」のように、これ以上割り切れない裸木として言葉を差しだすこと。比喩などという曖昧な逃げ道をつくらない。どの一行も、余分な枝葉のごとき言葉は削がれて、裸木のように立っている。確かに、この詩集は、一見、歳月、あるいは自らの人生を振り返っての感慨がテーマになっているように見えるが、そう言ってしまうと見落としてしまうものがある。丸田さんの眼差しには、どこか厳しいまでに物事や世界を透徹した感性がひそむ。つまり、みずからの人生を振り返るのではなく、これまでの人生の時間を新しい生の彫刻のように彫り出していく。回想や思い出ではない。今、現在が息づいている生の時間を彩る回想であり、思い出なのだ。生きることへの切実な願いと、生きてきた人生への潔い諦念とがまじりあっている。21年11月刊。

◎以倉紘平『わが夜学生』（編集工房ノア）。03年の『夜学生』を基に、『朝霧に架かる橋』（00年）、『気まぐれなペン』（18年）から増補して一書としている。以倉さんは長らく府立今宮工業高校の定時制で国語の教師を勤めてこられた。特に印象深いのは、生徒たちが授業で書いた「自叙伝」である。「現在の自分につながるもつとも意味深い経験、あるいは過去を語」らせた作文の引用と、以倉さんがそれぞれの生徒たちとかかわった内容が丁寧に記されていて思わず読み耽ってしまう。また、冒頭の三編の評論は、氏の詩の秘密を知るうえで興味を掻き立てられる。ひとことでは「大阪（弁）」に対する愛憎である。詩作においては大阪的なるものとは距離を置く一方で、「過ぎゆく日」で語られる大阪的なるものに対する底知れぬ愛着が、以倉さんの詩情を奏でる通奏低音に流れ込んでいるように思えてならない。21年12月刊。

◎以倉紘平『明日の旅』（編集工房ノア）第57回歴程賞を受賞した前詩集『遠い蜩』に続く第8詩集。前に「以倉さんの詩の見えないテーマは「時間」だと、かねがね感じていた。その詩の魔術は、人生のとある一時を、永遠の時間の層に映し込む技法にある。それは《ノスタルジア（郷

愁）の詩学」とでも呼ぶべきもので、喪失のかなしみを記憶の沃野に溶かし込む心のいとみなと言えたいだろう。思い出すことはすべて失われて還ってこない。ただ、そのかなしみはいつまでも時間の海をたゆたい、詩はそれを言葉で掬い取って、かけがえのない時間の結晶として差し出されている。この新しい詩集も、たつぷりとノスタルジアの抒情をそれぞれに味わうことができるが、身近に接してこられた人の死に触れた追悼の詩や、関わってこられた刀根山養護学校の生徒たちの詩なども収録されていたりして、以倉さんの人生のゆるやかな拾遺集の面影が漂っている。22年4月刊。

◎青木左知子『官界の行方』（濤標）第2詩集。前詩集について、「自らの感覚的なアンテナを奔放に発語に組み込んで突き進む。自分というものの存在に対する不可解さや不安を感性的に捉えるのが、青木さんの言葉の特徴だ」と書いているが、今度の詩集も前にもまして、日常を眼差す視線の奔放な運動や逸脱するイメージの不協和音は自在に詩の世界を席卷している。例えば「私ありき」という作品は、戯画的な自画像としてよめるが、「浮いて／浮いて／どうしても浮き上がってしまう／髑髏の／眼を抜けて／どうしても浮き上がってしまう／喉で噛みちぎった薬が伸びる／黒々とした再生を拒み／喉で噛みちぎった言葉たちは／とうに水底の澱となった／略／体軀のおく／骨がきしむ／その音へ食らいつく飢えた魚類の／したたかな争い」「以下略この徹底した・自己解体と言葉の容赦ない切っ先は尋常ではない。22年2月刊。

◎季村敏夫、高木彬編『1920年代モダニズム詩集——稲垣足穂と竹中郁その周辺』（思潮社）。この書は、大正から昭和初年にかけてのモダニズム詩のアンソロジー。そのほとんどは詩史とは無縁、無名の詩人たちである。当時の詩誌や同人誌を渉猟し、作品のみならず、詩人たちが生きた痕跡をできるかぎり掘り起こそうとする。巻末にある解題や詩人たちの略歴は貴重だ。神戸モダニズムにつきまとう、エスプリと異国趣味に彩られた海港都市神戸の明るい意匠のイメージに隠れていた、多くの無名の詩人たちに光をあてる試みを粘り強く続けてきた成果がま

た一つ重ねられた。二〇年代の詩人たちの、実に果敢な言葉の実験と、そのアヴァンギャルドの奔放な実態が、言葉の実験室という閉じられた世界でなされたのではなく、常に社会や世界や現実といった、時代の息遣いの中で行われていたこと、生きることが、言葉の実験的な営為を生み出す糧となっていることは重要だ。時代を生きることと詩を生きるとは切り離せなかった。そんな中、急死したり、不意に消息を絶った詩人たちも少なくない。彼らの存在が、季村さんを突き動かしたと言えるかもしれない。22年4月刊。

◎今村欣史『恒子抄』（私家版）。結婚五十年の記念とし編まれた今村さんの詩集である。掌におさまってしまいそうな小さな詩集。あとがきに「生まれ出た言葉に、たとえかすかでも心を動かされることのあるのなら、それも詩と呼んでいいのではないか。そう考えてこの言葉の連なりを『詩集』と呼ぶことにした。（略）」とある。謙遜の思ひも籠められた物言いだが、味わい深いあとがきも含めて四十編。それぞれ小さな作品ではあるが、これほどまでに無垢で思いやりに包まれ、そしてユーモアと含差を適度に滲ませた相聞の詩は稀だと思ふ。巻末の一編を引用する。「いつもわたしが先にやすむ／朝起きるのは後からだ／こうして恒子の寝顔を見ること少なく／五十年間過ぎてきたが／このごろわたしは／夜中に小便に起きることが増えた／小さな灯りの中で／見るとはなく／恒子の顔を／かなたのものを見るように／透かして見ていることがある／脳が覚めていないからか／それとも暗いからか／五十年間の見境がつかない／あれはいつたいたいのあたりなのだろう」（五十年）全編。22年4月刊。

■常任理事会報告

神田さよ

◆第4回常任理事会 11月3日（祝）県民会館 13時より。出席12名*入退会 逝去 春名純子*9月・10月会計報告。*第21回読書会決定 11月27日（土）神戸市教育会館501号室13時〜（杉山平一の詩について） チューター 今村欣史（会員）*会報50号12月1日発行。主な記事…詩のフェスタ報告・

ポエム&アートコレクション・文学紀行・会員詩集評*ポエム&アートコレクション。出品申込 22名 チラシの校正。チラシ作成1000部。*ホームページ読書会・ポエム&アートコレクションを更新。*文学紀行2022年3月13日(日) たつの方面*規約の補足について。次の総会で諮る。*関西詩人協会との交流会について*総会日程と実施場所。2022年5月15日ラッセホール・コスモス13時30分)

◆第5回常任理事会 2月20日(日) 13時〜県民会館 出席 8名 *入退会・名簿 現在会員数127名退会・2の名 入会・3名*会計 11月・12月8・1月会計報告 年会費未納者・今年度6名*第21回読書会報告 参加者32名*ポエム&アートコレクション展&講演会報告 出品者・21名 出品数・26点 図録を作つてホームページに載せる*特別講演「詩を書くということ」時里二郎会長 参加者・43名「詩の現在展」会員の詩誌・詩集の展示*文学紀行 会報第50号記載3月13日(日) J.R.姫新本線本竜野駅集合 現在申込み者数 15名*会報51号 主な記事 総会・詩画展・文学紀行・会員詩集評 別刷「会報アーカイブ」(大橋愛由等担当) 8pから12p*ホームページ会員の情報集める*アンソロジー来年度発行*関西詩人協会との交流会 実行委員会 12月11日(土) 両協会6名出席。決定事項実施日 2022年7月18日(祝) 13時〜17時 西宮市民会館大会議室101号 2022年にプログラムを決定。

*総会 日時:2022年5月15日(日) 13時〜16時ラッセホール・ハイビスカス 講演者:大西隆志朗読新入会員 4名。*ふれあいの祭典詩のフェスタひょうご 10月2日(日) 13時30分〜16時30分会ラッセホール・サンフラワー 講演を松下育男氏に依頼。

◆第6回常任理事会 3月20日(日) 13時〜県民会館 出席・9名 *規約補足について理事会・総会で諮る*入退会 退会1名 入会なし*会計・会計監査 2月・会計報告 会計監査日4月16日第8回文学紀行報告 参加者14名

*「ひょうご」現代詩集2022」16集 締め切り10月15日 補助金は今年度より減額*会報51号担当は高

谷常任理事 記事の確認。会報アーカイブ別刷りにする。送付は会報に同封する。*総会5月15日(日) 13時〜16時ラッセホール・ハイビスカス 総会資料は、次回理事会で配布*詩のフェスタひょうご2022 講師 松下育男氏 今年度より「ふれあいの祭典」と名称変更助成金減額のため朗読会なし。*関西詩人協会・兵庫県現代詩協会との交流会 新しく詩集を発行した会員の詩の朗読。4月23日の委員会で内容を決定。

◆第41回理事会 4月16日(土) 13時〜県民会館 出席16名 *総会 提出資料について検討*会報51号 *記事の締切:5月20日今回の担当高谷 発行日7月1日 会報50号までを纏めた、アーカイブ版を別刷りで印刷。会報とともに送る*「ひょうご」現代詩集2022 *参加申込はがき8月半ば 詩稿締切10月15日 *読書会 *松下育男の詩について 8月6日(土) 県民会館902号 チューター佐伯圭子会員*ホームページ総会、日本詩人クラブ関西大会、などをアップしている。*交流会 4月23日関西詩人協会と交流会の打合せ*詩のフェスタひょうご 今年度の予算案を提示*その他新入会員拡大への対策 各自検討して案を出す。*役員選挙 2023年1月下旬実施。

■他団体会報・詩書(2021・12〜2022・5) ずかけ 12月〜2022・1月〜5月号 (兵庫県芸術文化協会) とっとり詩人第42号(鳥取現代詩人協会) 島根県詩人連合会報No.90(川辺真) 岐阜県詩人協会会報第17号(天木三枝子) 大分県詩人協会会報161・162(井手口良一) 高知詩の会通信25号(林嗣夫) 詩界通信97・98号(北岡淳子) 関西詩人協会会報104・105号(左子真由美) 詩のひろば第14号(関西詩人協会)

福岡県詩人協会会報No.181・182号(脇川郁也) 日本現代詩人会報No.165・166(八木幹夫) 千葉県詩人クラブ会報No.256・257(根本明) 埼玉詩人会報第98・99号(川中子義勝) 岩手県詩人クラブ会報99・100号(福井良平) 青森県詩人連盟会報50号(藤田晴央)

山形県詩人会報第37号(高啓) 福井県ふるさと詩人クラブ会報(山内) 日刊ミニコミ紙竜神11・12月(るい編集工房) 福井県詩人懇話会会報107(渡辺本爾) いちご通信第31・32号(大分県詩人連盟) 兵庫県歌人クラブ会報206号(安藤直彦) 福島県現代詩人会報第127・128号(齋藤真) 岡山県詩人協会だよりNo.34(中尾一郎) 宮城県詩人会報第33号(佐々木洋一) 長野県詩人協会会報No.149(和田攻) 秋田県現代詩人協会会報第65号(横山) 詩人通信3月詩人学校860号(竹内正企) 栃木県現代詩人会報第78号(草薙定) 群馬県詩人クラブ会報No.319・320(井上英明) 宮崎県詩の会会報復刊49号(谷元益男) 静岡県詩人会報145(仲久喜輝夫) 中日詩人会報No.203(古賀大助) 北海道詩人No.151(村田護) 木立ち第141号冬(川上明日夫) ココア共和国4月号(秋亜綺羅)

山陰詩人218・219・220(川辺真) 木偶120(田中健太郎) 潮流詩派268・269(麻生直子) フラジャイル第14号(柴田望) RIVER181・182(横田英子) 呼吸152(現代京都詩話会・司由衣) 年刊歌集61(兵庫歌人クラブ) 現代詩2022(日本現代詩人会) 北海道詩集2021年度No.68(北海道詩人協会) 青森県詩集2021(青森県詩人連盟) 宮城の現代詩2021(宮城詩人会) 千葉県詩集第54集2021(千葉県詩人クラブ) 言葉の花火2021(関西詩人協会) 中日詩人集61(中日詩人会) 大分県詩集2021年版(大分詩人協会) 鹿児島県詩集第25集2021(鹿児島県詩人協会) 秋田県現代詩年鑑2022(秋田県現代詩協会) 岐阜県詩人集第9集2022・感想集(岐阜県詩人会) 島根年刊集第50集(島根県詩人連合)

福島県現代詩集2022 (福島県現代詩人会)
第9回金沢現代詩コンクール受賞作品集 (石川詩人会)

■会員の発行誌誌 (2021.12〜2022.5月)

現代詩神戸275・276 (三宅武)
別嬢115 (高橋夏男)
鶴鶴17 (江口節)
時刻表終刊号 (たかとう匡子)
ア・テンポ61号 (玉井洋子)
MeLange Vol.1・169 (大橋愛由等)
EDGING 50・51 (寺田操)
遙5号 (和比古)
あむの木通信第155〜158 (福永祥子)
汽水湖第4号 (福永祥子)
多島海41 (江口節)

■会員の発行書

荒川稔詩集『ことわり付喪神』2021.9刊 (七月堂)
丸田礼子詩集『夕陽が背中を押してゐる』2021.11刊 (濤標)
以倉紘平詩集『我が夜学生』2021.11刊
『明日の旅』2022.4刊 (編集工房ノア)
青木左知子詩集『官界の行方』2022.2刊 (濤標)
季村敏夫『1920年代モダニズム詩集』2022.4刊 (思潮社)
今村欣史詩集『恒子抄』2022.5刊 (私家本)

■会員の動静

◎和比古 兵庫ふれあい美術展洋画部門
「知らない街」兵庫県議会議長賞受賞
7月18・20・21日和比古個展西宮市民会館1階
◎日本詩人クラブ第22回関西大会担当理事 神田さよ
2022年5月14日神戸ラッセホールで開催
◎ひょうご日本歌曲の会 サロンコンサート6月26日
作詞者 紫野京子・高橋富美子・吉田定一・福田知子
柴田実・瑞木よう

■公募案内

第28回中原中也賞 応募締切令和4年12月5日

対象 2021年12月〜2022年11月迄に刊行された
現代詩集3部 中原中也記念館 TEL083-932-6430

第33回富田碎花賞

対象 2021年7月〜2022年6月末に発刊された奥付
のある詩集2部 芦屋市生涯学習課TEL0797-382091

第24回小野十三郎賞

対象 2021年7月〜2022年6月に刊行された詩集
2部 問合せ 大阪文学学校 TEL06-6768-6195

第33回伊東静雄賞

原稿用紙2枚以内(題名も含む) 問合せ 諫早市芸術文化
連盟

■退会

北岡武司、にしもとめぐみ、三浦照子、三宅武

■入会

津田真理子、馬場秀司、原田ひでよ

◆津田真理子

1949年生 兵庫県出身
住所 〒659-0015 芦屋市楠町9-19

倉橋健一氏、たかとう匡子氏に師事。

同人誌『雲』、『風
の音』同人。2021年8月 第一詩集『森のフクロウ
かあさんへ』濤標 2022年3月 手作り詩集『シロ』
趣味…音楽 モットー…本音で生きる

祈り

ツバメの第一群が商店街に到着しましたよ
元気な声で嬉しそうに挨拶を交わしてい
ました
遠い国から長い旅をしてきて

今年のはらは早くて

もう散り初めです
櫻並木はやわらかな新芽に輝いています
郵便局の夏椿はまだ若葉だけです
ね

何と 牡丹が三輪もつぼみを付けています

黄色 牡丹色 白と枯れていつて
最後に残ったピンク ずっと葉芽しか出なかったのに
杏の老木は花を見事に咲かせ 今

新緑の間に青い小さな実が

いっぱい顔をのぞかせています
落ちてしまわないで黄色に色づいてくれるかしら
ライラックが満開で 鈴蘭も首を垂れています
紫蘭 海老根蘭 額紫陽花が控えています
あら トカゲがちよろちよろと隠れたわ
命が次々に名乗りを上げる春
美しい地球の営みが続きますように
かあさんの祈りでもありましたね

◆原田ひでよ

住所 〒670-0036 姫路市山畑新田
732-2 ピアニスト 「いちばんぼし」同人 (1983〜
2004) 「日本児童文学」推薦作品に選ばれる 「岡山の
詩と童話」に選ばれる

めぐみの雨

かみさまのあいが
ふつてくる
そらいつぱいから
ふつてくる
もしも わたしが
大きな みずうみならば
大きな あいを 両うでいつぱいのためにためこんで
かわき苦しむ みんなのために使えるでしょう
もしも わたしが
澄んだ 池ならば
たくさんのあいを 両うでいつぱいにかかえこみ
その中で たくさんの魚を泳がせるでしょう
だけど わたしが
小さなにごった 水たまりならば
たくさんのあいを なんとしよう
せつかくの めぐみの雨を
ほんの少ししか うけとれない
小さなにごった 水たまり



でもね 水たまりも光るんだよ
 雨あがりの空は あんまり青いので
 あんまり青い空を ほんの少し写してね
 ほんとうに いい顔をして
 光るんだよ

水たまりは
 恵みの雨が大地をうるおしていった証し
 かみさまのあいなのこしたサイン
 だから ほんとうに いい顔をして
 光るんだよ

◇馬場秀司 1959年生まれ。住所 〒662-0813 西宮市上甲東園1-10-37-3309 本籍 神戸市中央区。新聞社の文化記者として東京・大阪で長く勤務。文芸、書評欄、映画などを担当。詩歴・所属誌なし。

泥の扉

あの泥の扉を開けようとした。
 重い。

全身が泥だらけになる。
 いくら押しても開かない。
 押そうとしたら、持ち手が崩れそうになる。

そもそもこの扉の先に何があるのか。
 それすら知らないでいるのに
 開けようとしている自分は阿呆ではないか。

それでも開けようと、何かもがいている。
 懸命に努力しようとする。
 そんな努力はやめにして、

もっと楽しいことはないかしらん。



それでもこだわって、泥の扉を開けようとする。
 そんな自分が情けなくも、いとおしくもある。

泥の扉は、いぜん開かない。
 もう放っておいた方がいいと思うのに、
 諦めない自分がいる。

ふしぎ。

■会員のイベント報告

◇第25回「風のたよりのコンサート」
 2022・6/5(日) 震災を語り継ぐ朗読と演奏のコーポレーション 会場・海外移住と文化の交流センター

■会計より

今年度が始まりました。今年度の会費納入をよろしくお願いいたします。未納の方は恐れ入りますが、納入よろしくお願い致します。年会費は4000円です。

振替口座 00920・9・111243

口座名 兵庫県現代詩協会 (担当：玉川侑香)

■事務局より

会員発行の著書・詩誌などの出版物は事務局まで送ってください。イベント開催時(ポエム&アートコレクション展)などに「詩の現在展」として展示する予定です。また、詩に関するイベント情報の案内・会員の動静もお知らせください。(担当：山本真弓)

■兵庫県現代詩協会ホームページについて

当協会ホームページには、協会主催の行事や会員からのイベント等の情報を掲載しています。また会員各位からの情報提供、寄稿をお待ちしています。「兵庫県現代詩協会」で検索して下さい。

<http://hyogopoets.sakura.ne.jp/main/>

(担当：北野和博 soranohitoj@yahoo.co.jp)

■担当

◎兵庫県現代詩協会事務局《山本真弓》

〒651-0002 神戸市中央区若菜通6-4-15-2003

Tel 078-241-3086

◎会計《玉川侑香》Tel 078-361-1334

◎会報編集《高谷和幸》Tel 079-447-3652

《和比古》Tel 0798-72-9308

■印刷《遊文舎》〒631-0012 大阪市淀川区木川東4-1

7-31 Tel 06-604-9325

新入会員をご紹介ください

《兵庫県現代詩協会》は詩に関する幅広い行動を行っており、読書会、詩画展や文学紀行などお互いの交流を図っています。詩を愛する集いの場として、新たなつながりに参加希望の方を求めています。詳しくはホームページをご覧ください。問い合わせなどある方は左記までご連絡下さい。

入会申込 担当：事務局
 Tel 078-241-3086

